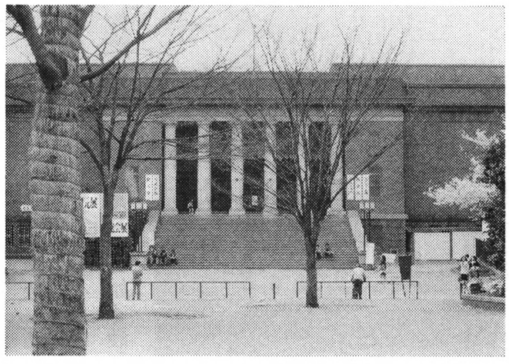
やと疑はしむるものさへあり　繪畫は不朽の盛事と云ふに斯くては筆を措て輒ち剝落するもの生ずべし　慨歎すべきことなり。余が多年傳習實驗したる狩野家祕事の彩色法も今にして傳受し置かずば暮齢幾くもなし（き）余の命と共に湮滅に歸すべしと心付きたり。學校にては彩色法の教授もあるべけれども若し許さるゝならば學生の爲に狩野繪所傳來の彩色法を實驗傳授しすべての祕事を傾倒して吝まざるべしと云ふ　余はその篤志に感じ老人に乞ふて科外に彩色法を口授實驗せしめんとて其標本及び口授稿本を準備中病を得て遂に起たず　唯標本の一部と口授稿本の自ら題して丹青指南といへる一書を留むるのみ　幸にして口授稿本は懇切丁寧を極め之を讀めは恰も口授面命を受くるの感あり。老人逝いて已に十幾年　此書は筐底に藏して人にも示さゞりしが近時繪畫の專家も小學の練磨を忽諸に付するの流弊益甚しきを歎ずること切なるが爲に今回校友會雜誌に付刊することゝなせり　是れ一には狩野家彩色法の湮滅を防ぎ一は畫家の帳中に寄與せんことを希ふに過ぎざるなり。

大正十五年一月

東京美術學校長　正木直彦

⑮ 東京府美術館開館

大正十五年三月、本校の隣接地に建設中であった東京府美術館が竣工した。明治以降、美術界の発展に伴い、上野公園で開催される展覧会の数も年々増加したが、十分な設備はなく、旧博覧会五号館や日本美術協会列品館がかろうじてその用を充たしていた。五号館は明治二十三年の第三回内国勧業博覧会の際に美術館として建てられたもので、その後改築され、竹之台陳列館と改称され、美術団体の聯盟組織である竹之台茶話会が管理した。



東京府美術館

欧米先進国に倣って十分な設備を施した国立美術館を作ろうという動きは美術界に早くからあり、大正七年には美術界代表者の建議案が議会で可決された。建設地に関して本校敷地を提供する計画が進められたことは本書第二巻（767頁）に記したとおりである。しかし、建設資金等の問題で建設は実現せず、そのため同十年、東京府で平和記念博覧会（同十一年開催）計画が持ち上がったのを機として竹之台茶話会をはじめとする美術界各方面から改めて新美術館建設促進運動が起こった。その折り、九州の炭鉱主で福岡県若松市会議長の佐藤慶太郎から百万円の寄付があり、この義挙により漸く計画が軌道に乗り、同十三年九月に着工した。

美術館は建築設計監督岡田信一郎、工事請負大林組によって約一年半を費して建設された。岡田は明治三十九年東京帝国大学工科大学建築科を卒業して翌四十年本校講師、大正十二年十月同教授（建

築科主任）となった。講師時代に大阪市公会堂の競技設計で一等当選となって頭角を顕わし、その後大建築の設計に携わり、正木直彦をはじめとして美術界に多くの友人を持っていた。彼はこの日本で最初の本格的ギャラリーを設計するにあたって美術館としての機能を熟慮し、陳列壁面の確保と採光、通気、美観、工費等の諸条件を充たす独自のプランを立てた。そのプランはのちに黒田記念館、本校陳列館の設計にも応用される。なお、東京府美術館の建築については前野嘉著「むかしむかし、なぜ上野にギャラリーが」（『美術館ニュース』第304～307号。昭和五十一年五月～八月）その他に詳しい解説がある。

美術館の開館式は大正十五年五月一日に挙行され、正木直彦校長は美術家総代として祝辞を述べた。また、開館祝賀の意味で同日から聖徳太子奉讃美術展覧会（公募展）が開催された。

⑯ 日本工芸美術会の創立

大正十五年五月十八日、聖徳太子奉讃展観覧のため京都から会員が上京したのを機として帝国美術院臨時会議が本校会議室で開催された。そこで、完成した東京府美術館に美術工芸の陳列場が整備され、聖徳太子奉讃展工芸部で力作が展観されたことから、帝展に懸案の第四部を新設する問題が話合われ、時代の要求として当然設けるべきとされたが、文部省側が予算が無く、美術工芸の会員決定に問題が生じる恐れがあったため、一時保留となり、帝展第四部実現はまた延期となった。その頃、津田信夫と赤塚自得が中心となって新たに日本工芸美術会が組織され、同年六月に創立総会が開かれた。

日本工芸美術会創立の経緯は筆名「獏」で高村豊周が記した「工芸展うらおもて」（『工芸時代』創刊号、大正十五年十二月、『高村豊周文集』V所収）に凡そ次のように記されている。四月頃、帝展が工芸室を倉庫代りに使用するという話が伝わったため、若手の工芸家が工芸室を最も正統な方法で使用しようということになり、豊周が渡辺素舟に相談した。ところが帝展の時期に工芸済々会が工芸室の借用を申込んであるとわかり、血の気の多い若手の作家をまた嫌がらせた。工芸済々会は懐古趣味、守旧主義の同人組織で工芸界に君臨する様子が見えるが、それよりはここに新しく全日本的総合的の工芸団体を作って新旧東西の別なく良い工芸品を一般募集して大展覧会を開くことにしたならばどうか、その主動者には誰がよいかと相談し、豊周が津田信夫にあたった。津田は若手の運動に非常に同情を持っていて、しかも津田自身は一方の色彩に偏るのを好まず、絶えず大局に眼をつけて大きい工芸界の流れを形作って行こうとする比較的公平な立場にある人であった。工芸済々会から再三入会を勧められても断り、若手の研究会にも関係せず、いつも双眼鏡を取って司令塔に立っているような感じで有象無象の動きを眺めていた。津田は、その少し前から赤塚自得と黙契があり、豊周の懇望と工芸界の形勢とに感じる所があったのか動き始め、全工芸界のためにここに新しい集団の必要なる所以を工芸済々会の中心人物である香取秀真、海野清等に話したところ、始めは工芸界の大局より、新しい力のある団体が生れては困ると反対され、有耶無耶になりそうだった。そこで工芸済々会と金工の研究会の両方に所属する北原千鹿、佐々木象堂、杉田禾堂、山本安曇が事務を進行させ、創立相談会の